私の戦争体験記

大久保　とよ（宮　本・68歳）

戦争の恐ろしさというものを、私共年代が一番忘れる事は出来ないでしょう。

終戦の年、二月二十四日B29低空にて何度も何度も上空を通る。そして雪も降ってるその日、近くへ焼夷弾が落ちる。私達親子は三人で防空壕の中にて、かじりつく子供にひもじい思いをさせまい、お砂糖がほしい、食べる事ばかりの暮らしでした。

昭和十九年生まれの娘が学校へ行くのに、その頃はカバンもありません。私の着物で袋を作り、そして下駄もはなおを縫い、セーラー服も自分流にて仕立て、配給配給の時代を皆があじわいました。幸いに駅の近くに魚市場がありましたので、子供二人学校へいかせるにはお金も思う程ありません。そこで私は行商をはじめ、朝五時市場へ行き、冷たい氷水に手をいれ、魚を求め知らないお宅へ一軒一軒売り歩き、十年働きました。このおかげで人々との気持がよく分かり、自分の生きる気力を強くしたと思います。

しかし、今の若い人達にはこれから先、私達の苦労はとても口にては言えません。何年先もずっと、平和の年が続きますよう祈ります。